

---

# 夜に咲く、赤い月

竣慎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜に咲く、赤い月

### 【Nコード】

N7316G

### 【作者名】

竣慎

### 【あらすじ】

ある封鎖された町で起こる不可解な事件が起こる。主人公、倉嶋優一はその町で真理を知る。

巻ノ月； 刻（前書き）

パソコンで書いているので携帯では読みにくくなっているかもしれ  
ません。

ご了承ください。。。

壱ノ月； 刻

目が覚めた

暗い部屋

寝転んでいた俺が目を開けると目の前に葉真っ黒な天井が広がっていた

誰もいない

なにもみえない

俺の四肢は確かに反応しているが、まるで自分の物じゃないような感覚に囚われる

何で、おれはここにいる？

俺は何故、ここに来た？

守る為  
そして

失わない為

泣かない為

咲かせないために

式ノ月； 霧

「ねえ、優一君。見える？」

「ああ、見えるよ」

俺より頭2つ分ほど小さい少女は俺にじゃれ合うようにして俺に擦り寄ってくる。

「ねえ、優一君？」

「なに？」

愛しい彼女は俺の顔を不安げに上目遣いで見上げてくる。俺はそんな彼女が堪らなく愛しくなり、彼女の頭を優しく撫でる。

彼女はまるでじゃれあう猫の様に俺の手を受け入れ、頭をもっと触ってと言うように身体を近づけてくる。

「ずっと……ずっと、一緒にいようね。優一君」

「ああ、ずっと、一緒だ。離さない、絶対、一緒に居よう、朱里<sup>あけし</sup>」

俺と朱里はその日、永遠の愛を誓った……

何で、ここに居るのだろうか？

俺は信号の壊れた横断歩道を渡っていた。

道路を通る車どころか、辺りを歩く人すら居ない。

誰もいない。俺は朱里を探していた。

俺はどうしてあの、暗い地下室で横たわっていたのだろうか？

思い出せない、目が覚めたときには暗い地下室に横たわっておりとり合えず、今の状況を確認しようと飛び起き、俺はこの誰もいない町に出てきていた。

携帯電話は圏外のまま動く気配も無い。朱里に連絡を取りたいのだが自分の現在地もわからない状態では連絡の取りようも無い。

標識や町並みから言って、ここが日本なのは確かなのだ。しかし、町は深い霧に包まれ、10m先はもう、白い霧に包まれており見え

ない。

カタンッ

「誰か居るのか？」

視界が限られている中で唯一研ぎ澄まされていた耳が不審な音を聞きつけ俺は振り向く。

振り向いた先には誰かの影が目に入り、その影は奥にある建物に入っていた。

もちろん、俺は追いかける。この不可解な町でただ1つの手がかりを見つけたのだ。追いかけない理由が無い。

7

「ここは……………旅館か？」

影が消えて行った場所は大きな旅館だった。

その旅館の玄関はまさに今、誰かが入ったかのように止まっているはずの自動ドアは、人一人分。小さく開いていた。

「ここは、誰か居るのか？」



一度、旅館を見上げた俺は、一瞬、今まで味わった事の無い恐怖に陥る。

悪寒　　なんてもんじゃない、これは絶望

何者も寄せ付けない、真っ黒な絶望の色が旅館を纏っている。

逃げ出す事も出来る。しかし、今はこの不可解な状況で朱里を探す必要があるとされる。

こんな状態だ。朱里を一刻も早く見つけてあげないといけない。

俺はそう思い、額にうつすらと浮かぶ汗を軽く拭い、その絶望の旅館へと、入っていった

参ノ月； 満ち欠け

私はどこかもわからない暗い地下室で目を覚ました。

何故ここに居るかは覚えていない。

私は身体を起こし、とり合えずこのくらい部屋に僅かに差す光。つまり出口へと見にくい足元を確認しながら一歩一歩進んでいった。

「ここは……何処？」

見たことの無い風景。ただわかるのは標識や町並みから見てここが日本であるというだけである。

私はふと、ポケットに入れっぱなしになっていた携帯電話を取り出して優一君に電話をかけようとする。

「あれ？ ……圏外？」

携帯電話の左上には確かに『圏外』と言う文字が刻まれ、電話をかけても優一からの返信は返って来ない。

私は誰もいない町で、1人、孤独を味わい。初めてこの恐怖に気が付いた。右を向いても左を向いても、誰一人、いや生き物すらない。

目に入るのは車や町を彩るビルのイルミネーションだけである。

「優一君を探さなきゃ……」

誰もいない町。どうやってここに来たのかもわからない状態で私は自然とこの町には優一君もいると脳が、かつてに断言する。何の根拠も無い断言なのだが、私の第六感がそういつているのだ。優一はこの町に居て、今私のことを探してくれていると……

ガタンッ

「っ!?!」

私は不意をつかれた大きな音に驚き、悲鳴を上げそうになる。

私はその音のしたほうをゆっくりと見つめる。

「? 優一君?」

霧の向こうに見えたのは、何度も見た愛しい彼の背中に間違いは無かった。例え霧で隠れていてもあの背中を間違えない自身が私にはあった。

「待つて! 優一君」

私は走り出した。走るのは余り得意ではないのだが、優一君は慌てて自分のことを探してくれていると思うと、自然にそれも苦ではなかった。

私は霧を抜け、うつすらと映る背中を追つと……

「ここは? 旅館?」

古い、純和風造りの旅館がそこには立っていた。

引き戸になっっている旅館の裏玄関は微かに、それこそ一人分が

通れそうなくらいの隙間が空いていた。

「ここに優一君が？」

私は再度、その旅館を見上げる。

純和風造りの旅館は空を包む霧を被りながら、そこに静かに佇んでいる。

ただ、この旅館は人をひきつけるような引力を私は微かながら感じ取った。

ここにいてはいけない！ 私の心はそう思った。

「だけど、ここには優一君が……」

そう、愛しい彼がこの旅館の中に入って行ってしまったのかもしれない。

もし、そうだとしたら、この危険な旅館のことを伝えないといけない。

私はそう思うと、もうこの旅館を怖いとは思わなかった。

次の瞬間。私は旅館へと一歩、また一歩と足を進めていた……

「……優一君？」

私は恐る恐る、その旅館の中に足を踏み入れると、そこは大きなロビーになっており、中は荒れて、廃墟の様になっており広いロビーには窓からうつすらとした光が差し込み違和感のある旅館の様子を更に加速させる。

しかし、ここで戻ることはできない。

私はゆっくりとロビーの奥に進んでいく。

「優一君！ 私！ 朱里だよ。返事して！」

私が出した大声は一度奥の暗闇に吸い込まれ、数瞬のうち山彦やまひことなり返って来る。

もちろん耳を澄まして聞いてみるが、物が動く音や優一からの返事は返って来ない。

聞こえてくるのは反響し、段々小さくなっていく自分の声のみであった。

「優一君？ ……何処にいるの？」

私は心の中からこみ上げる孤独感を心に留めて置く事が出来ず、思わず声に出してしまう。

「トンッ」

「えっ？」

不意に、私の耳に物音が聞こえてくる。

別にこれは空耳とかではない。確かに聞こえてきた音である。  
私はその物音の方向へ進む。

「これは……………懐中電灯と？ ……………封筒？」

カウンターの裏側に災害用の懐中電灯と、一通の封筒が置かれていた。しかし、先ほど聞こえた物音の正体はわからない。周りに動かせるような物はなく、辺りに散らばっている物はどれも軽いものばかりで自分の耳に届くほどの物音が鳴るとは思えない。

とはいえ、何も手がかりが無かったこの町でやっと手がかりになりそうなものを見つけた。私は閉じられている封筒を懐中電灯で照らしながら中の手紙をゆっくりと引き出した。

「……………！？」

私は驚愕の余り、懐中電灯と手紙を取りこぼし、甲高い悲鳴を上げってしまう。

身体が震える……………しかし、私はゆっくりと取りこぼした手紙を震える手で持ち、読み始める。

「これは……………血……………だよね？」

手紙は真っ赤に染められており、文字がかすれている所から見ると殴り書かれた事がわかる。

まだ、震える手が止まらない。私は震える手を自分で握り、大きく深呼吸をしながら、自分の身体を制し、そして文字を読み始める。

「が始まってしまった　月の満ち　欠け

もう止められな

い。　始まる　最後の　時が

殺　され

る　」

「なに？　これ、何なの？　この町で……………何が起きてるの」

止まっただはずの震えは再度始まり、私は初めてこの旅館の真の恐ろしさに気が付いたのであった……………

肆ノ月； 惨劇

俺は旅館の中の惨状に呆然するしかなかった。

倒れている旅館の備品、薄い光に照らされた壁に飛散する赤い染み、割れて床に散らばった窓硝子。

俺の目に映る全てが異様で、今まで俺が見たことの無い惨劇が俺の目に映っていた。

手が震える。先ほどまで、普通に歩いていた足とは思えないほど、俺の足は竦み、棒の様に、その場から動こうとはしなかった。俺は恐る恐る、壁に飛散している赤い染みに手を触れてみる。

少し乾いているが、まだ完全には乾いておらず、指にしっとりとした湿り気が伝う。

「これは、血？」

指の先に付いた赤い染みは明らかに絵の具やペンキではない、俺は指の先に付いた染みをズボンで拭い直ぐに壁から離れる。

「さっきの影は何処に行つたんだ？」

先ほど見つけた影は小さいものであり、子供や女性がこんな惨劇の現場を平然と通り抜けるわけが無い。

見間違い？ いや、そんな事はない。霧で薄くなっていたとしてもこの緊急時に神経が研ぎ澄まされている状態で目の端に映った影を見間違えることなんて考えられなかった。

何より、物音も俺の耳には届いていたし、旅館の自動ドアも開いていた。



「奥に進むしかないのか……？」

幸い薄暗くはあるが、外からの僅かな光で旅館の中は目で見れる範囲まで明るくなっている。携帯のライトを懐中電灯代わりに使うという手もあるが、いつ圏外が直り、朱里に繋がるかわからない状態では電池残量を無駄にはしたくなかった。

夜になれば動く事もできなくなってしまうが、今なら大丈夫であろう。時刻は14:00。

夏の今の時期、日が沈むまでにはまだ時間がある。それまでに朱里を見つけて、この不可解な町から脱出しなければならぬ。

俺は意を決し、血の匂いが充満した旅館の奥へと足を進めていった……………

どれくらい、歩いただろ？

5分？ 10分？ いや、それ以上歩いている。

俺は、薄暗い旅館の中を細心の注意を払いながら歩き続けた。相変わらず、壁には赤い染みがこびり付いている。しかし、その染みを付けた人たちはまだ一人も見かけていない。

手がかりは先ほど町で見た小さな影だけ、しかしその影も今やすっかり見失って俺はただ、違和感が強くなってくる旅館の奥のほうへ歩み続けるしかなかった。

それにしても、俺は何でこんな所に居るのだろう？ 一番新しい記憶を脳の中から引っ張り出して、考えてみる。

俺はこの町で目が覚める前は確かに自分の部屋のベットで寝ていた。

隣には朱里がいて、戸締りもしっかりとしたはずだった。しかし、そこからの記憶が欠落している。もし、誰かに運ばれたとしても、割りと睡眠が浅い俺は直ぐに目が覚めて異変に気付くであろう。

もし、気付かずにここにつれてこられたとしても、それは何の為に？ 運んできた奴らに何のメリットがあるんだ？

こんな惨劇を赤の他人に目撃させ、楽しんでいるなんて事はまず考えられない。そんな事をして、もし俺たちがこの町を脱出してしまったら間違いなくこの惨劇は表の世界に公表される。

流石に現場がこんな状態では犯人を特定する事は難しいであろう……いや、まず不可能に近い。

しかし、やはりそれが俺たちをここにつれてきたという絶対の自信に繋がるとは考え難い。

俺は、この町に連れて来られた経緯を考えつつ、旅館の一部屋ずつ確認していくと、ある異変に気が付いた。

「床が……歪んでいる？」

俺は床に跪き、少し埃を被った床をノックしてみる。

コンッ                  コンッ                  コンッ                  カンッ

「どこか？」

俺は木造の床の目に爪をたて、力を入れると、

床は音をたてて持ち上がった。

下からは生暖かい風が吹き上がっており、階段になっていた。

「何で、旅館に地下があるんだ？」

地下は暗く、1m先も見えない。流石にこの中を明かりなしで通るには無理がある。

俺は仕方なく、携帯のライトを付けようとポケットに入れていた携帯を取り出す。

カンッ

「っ!？」

不意になった後ろからの物音に俺は驚き、尻餅を付いてしまう。心臓がバクバクなっている。俺は心臓を落ち着かせて音のした方を目を凝らしてみると、そこには

「懐中電灯？ 何でこんな所に……………」

目の前には懐中電灯が落ちていた。入ってくる時も入った後も、しっかりと目を凝らし、辺りに何か使えるものや手がかりになるような物は探した。天井の方には懐中電灯を引っ掛けるような所はないので上に掛かっていたわけでもない。

この部屋は荒れてはいるが、今、最も必要とされる懐中電灯を見

落とすわけではない。

「じゃあ、これはどこから？」

俺は不快感を感じながらも恐る恐る、懐中電灯を手に取り、スイツチを押すと、しつかりと明かりが付き、薄暗かった部屋は光でよく見えるようになる。

俺は息を整え、振り向くと、地下からは相変わらず生暖かい風が吹き上げてきている。

「行く……か……」

俺は額から噴き出る嫌な汗を拭い、真っ暗な地下を照らしながら、進んでいった……

伍ノ月； 伝染病

「何なの？　ここで、何が起きてるの？」

私は竦む身体を自分の手で抱きしめながら目尻から溢れてくる涙を必死に堪えていた。

途端に優一が恋しくなり、小さな声で優一の名ばかり呼び続ける。しかし、そんな事をして優一は現れる気配などない。第一、ここに優一が居るといふ確かな確証すらないのだ。

今まで、優一がここに居るといふ、思いで何とか平常心を保ってきたのだが、この手紙のせいで今の朱里の精神の支えの糸はぶつとりと音をたてて切れてしまった。

「優一君はいない……誰も……助けに来てくれない」

私の心の中に『絶望』の二文字が深く刻まれる。

深い孤独感と共に、形となって現れた恐怖は簡単には拭う事は出来ない。

「優一君……何処にいるの？　助けてよ……怖いよ……」

私は今にも消え入りそうな声で床を這いながら優一君に助けを求め。

腰が抜けてしまっているらしく、床を這うような格好しか出来ない今の私はさぞ、弱っているであろう。

「……誰か？　……いるのか？」

「ひいっ！？」

私の耳に届いたのは確かに人の声だった。  
だが、明らかに優一の声ではない。野太い男の声であった。

「だ、……………だれえ？」

私は震えた声を精一杯口から吐き出す。

呂律すら回っておらず、相手に伝わっているかも怪しい。

と、いきなり私の顔に懐中電灯の光が向けられる。

「……………ここ、人ですか？」

私は恐る恐る聞き、その人の顔を見ようと目を細める。

「待てっ！」

「ひいっ!？」

いきなりその野太い声の男は叫び、私は身を竦めてしまう。

「良いか？ よく聞け、まず目を閉じろ」

「……………は……………いい……………」

何を言っているのが良くわからなかったが、私は懸命に目を瞑った。

「よし、それじゃあまず、名前と歳。それと親しい人間の名前を言え」

「私は、倉嶋朱里です。歳は21、親しい人は優一君です」

「……………よし、目を開けて良いぞ」

私が質問に答えると野太く、緊張感のあつたその人の声は少し柔らかくなったような気がした。

ゆっくり目を開けると、そこには大柄な男性が立っており、私が腰を抜かしている事を察してくれたのか、近くに倒れていた椅子を

立てて私を座らせてくれた。

「すまなかつたな。あんたはこの町の人じゃないな」

「……はい」

「俺は松田まつだ 尚吾しょうごだ。この町で建具たてぐの職人をやってた者だ」

「やって……いた？」

尚吾さんの『やっていた』と言う言葉に私は少し違和感を覚えて不思議そうな顔を見ると、尚吾さんもそれを察したのか？ 少し苦笑いのような笑顔を見せ、話してくれた。

「この町は、死んだんだ」

「『町』が、死んだ？」

「ああ、外から来たならわかると思うがもう、この町には『人』は数えるぐらいしかいない」

『人』と言う言葉を強調した尚吾さんは話を続ける。

「月の満ち欠けが始まって、この町は死んだんだ……」

俯く尚吾さんの顔はよく見ることが出来なかったが、多分寂しそうな顔をしていたと思う。

「さあ、ここは危険だ。この町から出るには地下から水脈を通るしかないんだ。さあ、行こう」

尚吾さんは私に手を差し出してくれたが、私は暫く落ち着いて話を聞くことが出来たので、腰はもう戻っていた。

「大丈夫です。行きましょう」

「わかった。こっちだ」

私と尚吾さんは、そのまま旅館の奥へと足を進めて行った。

尚吾さんは私をある部屋の一室に案内してくれた。この部屋に来る途中の老化は荒れ放題だったのに対し、そこは比較的荒れては居らず、床に散乱している物も少なかった。

尚吾さんはなにやら、床を触って何かを確認しているようだったので私は懐中電灯でそれを照らし、じっと待つ。

「ここだ」

尚吾さんがそう言う。床が剥がれ、そこから真つ暗な階段が現れた。

階段の奥から来る生暖かい風は私の頬を撫で、髪を揺らす。

「俺が、先に行くから、あんたは階段に入ったら床を元に戻してくれ、なあに、簡単にはまるから大丈夫だ」

いきなり用事を任せられ、私の顔が不安で歪んでいた事に気付いてくれた尚吾はニカツと笑い、私の緊張をほぐしてくれた。

「じゃあ、行くぞ」

尚吾さんは階段に入り、私も後から続く。

尚吾さんの言われた通り私は床を動かし、私たちが入ってきた場所にその床をはめる。

ガチンツと、鈍い音と共に床ははまり、外からの微かな光も遮断した。



「よし、合格だ。今から地下に行くから、ゆっくり付いて来い。焦る事はない」

私は頷き、尚吾さんの背中を追う。

この旅館に地下があるとは知らず、驚くばかりであるが、それより驚くのは尚吾さんの存在であった。もし、今尚吾さんとあっていなかったら、と思うとゾツとして言葉が出てこない。

多分、声が枯れるまで泣き続け、終いには硝子を使って自殺を考えたであろう。

しかし、今は違う。尚吾さんが先導してくれている為、私は安心して先に進む事が出来ていた。

「階段が終わるぞ、足元に気を付けて」

尚吾さんがそういうと確かに階段は終わっており、地下の地面が懐中電灯に照らされていた。

「尚吾さん。そう言えば、さっきは何であんな質問をしたんですか？」

私は心に余裕が出来てきたのか、尚吾にそんな質問をする。

「っ……それは……」

と、尚吾さんは明らかに顔を歪め、渋い顔をする。

唇を噛んで言葉を選んでいる尚吾さんの顔を見ると私は流石に聞くべきではなかったのだと、少し罪悪感を覚える。

「あなたが『月の満ち欠け』になってないか、確認してたんだよ」  
再び低く、野太い声が私の耳に返って来る。私はドキツとして一瞬声を詰まらせたが、再び質問する。

「『月の満ち欠け』って何ですか？」

「……………」  
長い間の間も尚吾さんは歩みを止めず、私を先導してくれている。もしかしたらその、『月の満ち欠け』が、あの手紙を書いた人に何らかの害を与えたのかもしれない。

私はそう思うと背筋を凍らせ、額に嫌な汗を溜める。

「伝染病だよ」

「えっ？ ……伝染病？」

意外な言葉に私は驚く。

「『月の満ち欠け』はこの町特有の伝染病だ。その病気は何百年に1回の確立で起きる爆発的な感染力を持つ病気で、それに掛かった者は……………自我を失い。人を襲う」

「っ！？」

私は息を呑んだ。

だが、そう考えれば説明が付く。

誰もいない町、荒れた旅館、町を出る為の地下水脈。

どれも、辻褄<sup>つじつま</sup>が合う。何故尚吾さんがここまで怯えているかという事も、何故、町を出る方法が地下水脈しかないという事も。

それは、伝染病を外に解き放たない為だ。

何百年に一度の伝染病と言われていても、もしその一度が、閉鎖されたこの町以外で起きたら、それこそ莫大な被害。いや、日本人が全員その伝染病にかかったら、それこそ日本は滅亡する。

「一度、『月の満ち欠け』にかかった者は自我を失い。死ぬまで人を襲い続ける。完治はありえない。何百年に一度しかないこの病気が書物で受け継がれるしかなく、対処法なんて、何処にも残っていないんだ……………」

尚吾さんは顔を歪めながらも、その話を暫く続けていた………

陸ノ月； 指輪

「少し休もう、水脈に出ても、近くの町までは1時間以上歩かなければならない」

地下を歩き続けて一時間ほど経って尚吾さんはそこから辺から適当な石を持ってきて、休憩するように促がしてきた。私はその言葉に甘え、石に腰を掛け、休憩を始める。

実際、こんなに長い距離を歩いたのは久しぶりで足も少し疲れていた。

「俺の懐中電灯を付けておくから、あなたの懐中電灯は切つとくれ。水脈を歩いている時に2つとも切れましたじゃ洒落にならないからな」

「わかりました」

私は、懐中電灯のスイッチをOFFにする。

「あなた、さっき言った。『優一』って彼氏かい？」

「いえ、……………私の、夫……………です」

自分ではわかっていることを言うのは少し恥ずかしいが、まあ隠すこともない。

「そうか、あなたみたいな美人な人を貰えるなんてね、その『優一』って奴は運が良いな」

「……………いえ、そんな事はないです。まだ、結婚して1ヶ月ぐらいしか経っていませんし……………」

「！ そうか……………なら、何としてもあなたをここから脱出させねえとな」

尚吾さんは少し驚いたような様子を見せると、急に穏やかな表情になり、私にそう言ってくる。

「尚吾さんは？」

「ん……………ああ、俺も妻と子供がいるな」

「今は？」

「『月の満ち欠け』が始まって直ぐ、この町から脱出させたよ、多分今は窮屈な生活をしているだろうがな」

「窮屈な生活？」

その言葉に私は、ふと疑問を抱き、聞き返す。

「ああ、『月の満ち欠け』は発症してしまうともう治せないが、発症する前にその伝染区域から抜けて暫くすれば、発症はしないんだ。だから、今、俺の家族は隣町の緊急倉庫で軟禁されてる。まあ、軟禁といっても食べ物もあれば、トイレも風呂もある。空が見えないだけだから、暫しの辛抱って奴だ」

「そうなんですか」

「おっと、長く話すぎたみたいだな、もう大丈夫か？」

尚吾さんは腕につけていた時計を見て、私に聞いてくる。

「はい、十分休憩も出来ましたし、行きましようか」

私と尚吾さんは2人で頷き、そのまま長い地下をゆっくりと前進していった……………

カツンツカツンツ

俺の靴が地下への階段を踏みしめるたびにカツンツと言う音が鳴り、反響し俺の耳に届く。

手に入れた懐中電灯は切れることなく俺の行く先を照らし続けてくれている為、俺は順調に長い地下への階段を降りていた。

日の光が無いせいか？ 時期は夏と言うのに肌寒い。薄い長袖を着ていた俺にはこの肌寒さが少々気になる。

「終わったのか？」

段差の終わりが見え、俺は地下の地面に降り立つと、懐中電灯で周りを照らす。

「ん？ ……………これは？」

俺は足元に何か光る物を見つけ、照らしながら近づいてみる。

「指輪……………か？」

少々歪んではいるが、確かにこれは指輪であった。ふと、朱里の物かと背筋を凍らせるが、良く見てみるとデザインから大きさまで

全然違うものだった。

大きさからして、男物であろう。多分、ここに逃げ込んだは良いが力尽きて倒れてしまったのである………ん？ 待てよ。

俺は一瞬、大切な事をスルーしてしまったと思い、もう一度良く考える。

「『ここに逃げ込んだは良いが力尽きて倒れてしまった』なら、死体は何処だ？」

俺は裏側に名前のイニシャルが入っていることに気付いたからこれが指輪だとわかったんだ。

この指輪はもう原型を留めておらず、イニシャルは擦れて読めない。

ここまで破損している指輪なのに、何故、血の一滴も付いていない？ 外れた指輪の血を態々ふき取り、そのまま息絶えたのか？

やはり、どう考えても疑問が、残る。

もし、血をふき取り息絶えたのなら、死体は何処に行った？ もし、まだその男が生きているなら何故、血までふき取った指輪をその場に置いて行った？

壁に飛散した赤い染みから凶器は刃物や重量のある鈍器と言う事は推測できる。

部屋一面に血が飛び散っているのだ、もし、この場で殺された男がいるのなら、何故犯人は武器を持ち替えた？ そのまま刃物や鈍

器でよかったはずだ。

俺は、違和感を覚え、辺りを懐中電灯で照らす。  
しかし、他には光に反応するものはなく。  
もちろん死体や犯人の人影もない。

「急いの方が良いかもしれない……」

俺は不安を胸にしまいこみながら眩き、そのまま地下の通路を駆け抜けた……



漆ノ月； 赤い月

「尚吾さん。ちょよ、ちょよと待ってください」

地下の通路を照らしながら歩き続けても何時間経ったであろう？ 一向に尚吾さんの言う水脈は見えてこなく、私の足は終わりのわからない通路に疲弊し、震えていた。

一方、尚吾さんは息の1つも乱していない。それどころか汗1つ掻いておらず、肌寒い地下とはいえ、外は真夏なのだ。それなのに汗の掻かない尚吾さんに私は密かな不信感が芽生え始めていた。

「ああ、悪かったな。確かに俺のペースに合わせてたら疲れるだろう、そうだな、少し休もう」

しかし、私の不信感を吹き飛ばすかのように尚吾さんはニツコリと微笑み、また手ごろな石を持ってきて、私が座る場所を確保してくれる。

「……………ありがとうございます」

歩き続けて乱れた息を整えながら、私は尚吾さんに俺を言っつてゆつくりと石にしゃがみ込む。

「尚吾さん、後どれぐらいなんでしょう？ 言いづらんですが…」

「ああ、すまなかつたな。この通路は本来自転車やバイクで移動するから歩くと長く感じられるんだ」

「バイクで？」

確かに通路と言っても、大型バイク二台がすれ違うには十分の幅と、地面は真っ暗な先の通路までコンクリートで舗装されている。

「だが、大丈夫だ。ここら辺まで来れば後数十分で地下の出口に行

ける。出口の近くには小屋が2つ建てられているから、出たらそこでまた休憩しよう。それで、一晩休んだら、次の日の早朝に隣町に出ればもう安心だ」

尚吾さんはニツコリと笑いながら、これからの計画をスラスラと話してくれる。

今まで先の見えなかったこの移動も、そこまでしつかりと計画を立ててくれているなら安心だ。私はなんだが、先ほどまで自分の中にあつた不信任に罪悪感を感じ、尚吾さんに申し訳ない気持ちになる。と、尚吾さんは私が、眉をゆがめた事に気が付いたのが、俯き気味だった、私の顔を覗き込んでくる。

「悪かったな」

「へっ？」

「移動の計画も教えられなかったら、不安になるのも当たり前だ。俺だってゴールのわからないマラソンをずっと走っていられる自身はない」

「どうやら、私の考えていた事は筒抜けだったらしく、私は顔を真っ赤にして俯く。

「……………すみません」

「まあ、気にするな。それよりあと少しで助かるんだ。あんたはそれだけを考えとけ」

「あ、あの……………尚吾さん？」

「何だ？」

「さっき言っていた『月の満ち欠け』にはなにか前兆と云うか……………感染しているってわかる方法はないんですか？」

私は『月の満ち欠け』の話をしてからずっと、思っていた事を勇気を出して聞いてみる。

これだけ入念に動いている尚吾さんならば、そのことも知っていて、多分、私を安心させる為に教えてくれると思う。

「……『月の満ち欠け』は別名『赤い月』って言われてるらしい」「赤い……月？」

私が質問をすると尚吾さんの顔がいきなり真剣になり、しかしはぐらかすことなく、しっかりと話し始める。

「ああ、まず発症の合図は鼻血だ。次に目、耳と血が出て、そこから段々自分の名前、歳と忘れて行つて最後に自分の親しい人の名前を忘れて……最後は何も考えられなくなり、人を襲い始める。その襲う人に血が滴っている様子から『赤い月』って呼ばれてるらしい。」

私は自分の背筋が凍るのを感じ、身震いをする。

聞かない方が良かったのかもしれないが、それは違う。今の状況を知らなければ、もし、尚吾さんとまた逸れてしまった場合に私はまた、錯乱し、自分で命を落とす事になるだろう。

しかし、そうすると残された優一君はどうなる？ この町に居ると信じていた優一君はいなかった。それだけで、私は優一君の安全を確信し、どこか心の中で安堵していたのかもしれない。

もし、ここで私が死んでしまったら残された優一君はきつと悲し

むだろう。多分、優一君の性格だったら自分を責め、私の後を追おうと考えるかもしれない。そんな事をさせてはいけなかった。

私の夫を  
私の最愛の人を  
私の初恋の人を

死なせるわけには行かなかった。

私はもう一度、自分に喝を入れて目を開ける。

「尚吾さん、生きてここから出ましようね」

「ああ、そうだな、その『優一君』の為にもな」

尚吾さんは真剣な顔をまた笑顔に戻し、私に微笑んでくる。

2人はそのまま小休止を終え、歩き始める。

「嘘………だろ？」

俺は足が竦んでいた。それこそ、今にも腰が抜けそうな勢いだっ  
た。

赤い染みの無かった通路を歩いていた俺はある異変に気付いて足を止めた。

それは少し前、嫌になるほど嗅いだ臭い。息を止めたくなくなるようなツンとした刺激臭が俺の鼻腔を突き、俺はその余りにも酷い臭いに顔を顰め、眉を寄せていた。

急いでいた足を一旦止め、鼻を掴みながら懐中電灯で辺りを照らす。

「ん？」

俺は照らした先に俺の方からは影になっている場所にもう一つ小さい通路を見つけた。

これは急ぎ足で移動していたら、まず視界が制限されているこの状態では気付けない。俺はその大人がしゃがんでやっと入れるほどの小さな通路を照らして奥を見る。

奥にはなにか光るものがあり、俺は手がかりになるのではと膝を付き、その通路を入っていく。

「っ……なんだ？ この臭いは？」

先ほどまで俺の鼻を刺激していた臭いはこの通路の置くから臭って来ているらしい。しかし、俺は手がかりになる物があるならと臭いを我慢しながら、そのまま狭い通路を抜け、奥の方へ出る。

「っ……………何なんだ？ この臭いは…………っ!？」

俺は思わず懐中電灯を取りこぼしそうになり、慌てて掴みなおす。

震えが止まらない……………刺激臭はこの場所に入ってから一気に強くなり、俺は眩暈を覚える。

「うげえっ……………ガハツゲホッ」

俺は壁に向かって嘔吐し、激しく咳き込む。

「何なんだよ……………これはよお……………」

俺の目の前には 小さな子供と

指輪をした

女性が

血溜まりの中で

死んでいた.....

「何で？ ……………人が…………」

俺は何度も嘔吐し、涙目になりながら、胃の中身を空にした。地上の赤い染みを見た時とは訳が違う。

俺の目の前で同じ人間が死んでいるのだ。俺は壁に張り付き、これ以上動けない事もわかつてはいるが、懸命に後ろに下がろうとする。

2つの死体の肌はもう青くなっており、死後、数日は立っている。女性は20代。朱里が2、3年したらあのくらいになるであろうと言っ女性。

子供は明らかにまだ幼い。もしかしたらまだ5歳くらいなのかもしれない。亡くなっている女性は男の子の死体を抱きしめるようにして息絶えていた。

「あ、あの指輪……………もしかして？」

俺はポケットに突っ込んでおいた歪んだ指輪を取り出し、女性がはめている指輪と見比べてみる。

「同じだ……………同じ指輪だ……………もしかして、この人たちを殺した犯人は？」



「うわぁっ!?!」

俺は不意打ちの様になった携帯に驚き、飛び上がる。

圏外になつていたはずの携帯は電波が2つ立っており、着信は

朱里『!?!』

「朱里か!?!」

『うん、やっと繋がったよ優一君』

思っていたより、元気な声を出す朱里に俺は自分の予感が外れている事を願い、朱里に質問をぶつける。

「今………何処に居る!?!」

『え? えっと………その………なんて言ったら良いのかな? 地下通路かな?』

俺はその瞬間。頭をハンマーで殴られた様なショックに襲われる。俺の家の近くに地下通路の様なものはない。

俺は自分の家の寝室で寝ていて、起きた時にはこの不可解な町にいた。その時、家には隣に朱里も寝ており、今朱里は地下通路に居るといつている。

「朱里っ!?! 今は1人か!?!」

『へっ? ううん、違っよ』

「誰だっ! 俺の知っている奴か!?!」

『ううん、違っよ。尚吾さんって言う人。それよりどうしたの?』

そんなに慌てて……」

朱里の今の様子だと、俺が同じように地下にいるとは夢にも思っていないのだろう。

「わかった。待ってるっ！ 直ぐ行く」

『へっ？ ちょっと待って！ 来るって、今私は  
ピッ』

俺は一方的に携帯を切って、狭い通路をしゃがみながらもう一度先ほど通っていた通路に出ると、そのまま懐中電灯を握りしめたまま真っ暗な道を走っていった……

「どうした？」

「あつ、いえ。何故かはわからないんですが、圏外だった携帯にいきなり電波が立って、優一君に電話したら、場所を聞かれたと思ったら急に電話を切られて……」

「……………そうか、『優一君』も忙しいんだろう。さて、休憩も済んだらうしそろそろ行くこうか」

「はい」

尚吾さんは立ち上がり、私の手を取って、座っていた私の身体を起こしてくれる。

「？」

「ん？ どうしたんだ？」

「あつ、いえ、その……尚吾さんの手がなんだか冷たい気が……」

…

「そうか？ 俺は気付いていなかったが」

尚吾さんは不思議そうな顔で私の顔を見ているので私は自分がおかしいのだと思い、お尻に付いた砂を軽く叩くとすっと立ち上がる。

「すみません、きのせいですよ。じゃあ、行きましょう」

「ああ」

尚吾さんは頷くと懐中電灯のスイッチを付け、歩き出し、私もその背中に続く。

私は歩きながら携帯を一度見ると、その左端には圏外の文字が刻まれており、もう優一と連絡を取る手段はない。

別に良いよね。優一君はこの町にはいないんだし……

尚吾さんは相変わらず、周りに注意しながらも先へとずんずんと歩いている。その背中は頼もしい物があり、この人と一緒にいれば、私はこの町から出られると、私は確信できた。

待ってて、優一君。直ぐに会いに行くからね。

「ハッ……ハアッ」

俺は短く息を吐きながら、この先に居るはずの朱里の後を追っていた。

これだけ大きな地下通路だ。もし、ここ以外にも地下があったとしたら……

俺の脳裏に最悪の事態が過ぎり、動かす足を速める。

「……待ってるよ。朱里！」

玖ノ月； 涙

狭い部屋に転がされていた無残な死体。

その中の一体の死体の指には俺が少し前に拾った歪んだ指輪と同じ物がはめられていた。

俺が指輪を拾った所にはその持ち主の死体はなく、その指輪を歪めた犯人も居なかった。俺の考えがもしあっているとすれば、朱里が危ない。

朱里は今地下通路にいといた。もし、俺同様にこの不可解な町に連れて来られていたとしたら……いや、もうそんな甘い願いは通じないのはわかっている。

ここまで情報が揃っていれば朱里もこの不可解な町にいるんだ。

「っ ……!?」

一瞬、俺の脳裏にさっきの2つの死体の映像が鮮明に映し出され、その内の指輪をした女性が朱里とリンクする。

「ダメだ。そんな事はさせちゃいけないっ」

「ふう……ふう」

私は軽く息を吐きながらキビキビ歩く尚吾さんの背中を追う。

私の歩く地下通路はいつの間にかさきほどの平坦な道のりとは変

わり、緩やかに上がる坂になっていた。これは出口が近くなり登っている事を示している事であって、私も内心素直に喜んでいる。

しかし、尚吾さんは何故かわらぬ顔をして歩いている様子を見ると私はどうしてもその横顔に不安を覚えてしまう。

もちろん、尚吾さんに不満があるわけではない。そんな事を言ったらまさに『恩を仇で返す』と言うものだ。それこそ感謝しても仕切れないほどの事を尚吾さんはこの数時間の間にしてくれていたし、私はそれに対し感謝していかないわけでもない。

だが、何故？ 私はこんなにも心に不信と不安を抱えているの？

「おい、大丈夫か？」

「へっ？ は、はい！ 大丈夫です」

いつの間にか止まっていた尚吾さんは、私の方に向き直り、不審な顔をしていた。

私は自分の不満が顔に出ていたのかと思い、慌てて顔を覆い話を換えようとする。

「え、えと……そう言えば尚吾さんは指輪をしていませんよね？」

「ん？ まあな」

「如何してですか？」

不躰では会ったが話を変えるには丁度良いタイミングだった。

「ああ、大体結婚している男は指輪を外している事が多いし、俺は建具の職人をしてきたからな。指輪をはめっていると傷つくだろうし、それにもう指輪は………」

「へっ？ 何ですか？」

最後の方の言葉を濁した為、尚吾さんの言葉は良く聞き取れなかった。尚吾さん本人も一瞬だけ暗い表情を浮べるが、直ぐにいつも

の笑みに戻したようで、その暗さの意味を知る事は出来なかった。

「あの」

「さて、足が止まってしまったな。行くぞ」

態とか偶然か、尚吾さんは私の言葉を遮り踵を返し歩き出す。私はその暗さの意味を知る術はなかったただ尚吾さんの後ろを付いていくしかなかったのだ。

頼りない。

私はこんな事で良いのかと考え始めていた。尚吾さんと言う頼れる人が出来てから、その人に任せっきりだった。

こんな事で、これからの優一君と暮らせるのであろうか？ それこそ、頼りない女だと罵られ、直ぐに捨てられるのではないかと言う不安が心の何処かを過ぎる。

私は不安に刈られた。

今の私の生きる意味にもなっている優一君に見捨てられでもしたら、私はそれこそ、生きる意味をなくしてしまう。

怖い。

私はもしかしたらこの町に来て初めて本当の『怖さ』にであったのかもしれない。

「尚吾さん！ 私」

声をかけずには居られなかった。

例え、数時間前に出会った人であったとしても、尚吾さんは十分に頼れる人であったから

「っ！」

「えっ、尚吾さん？」

しかし、私の言葉を遮り尚吾さんは苦しそうに膝を折り、しゃがみ込んでしまっ。

「だ、大丈夫ですか？ 尚吾さん！」

「しょ……っ……っ？」

その時、私の脳裏に冷たい予感が

走る

「えっ？」

私はその感覚に驚き思わず声を上げてしまっ。

頭を抑えながら目を硬く瞑っている尚吾さんはつつすらと目を開け、自分の名前を力ない声で呟く。

「如何したんですか！？ 尚吾さん！」

「誰 だ？」

「えっ？」

「『しょっ……』って誰のことだ？ あんたは知ってるのか？」



私は背筋が凍った。

『自分の名前、歳と忘れて行って最後に自分の親しい人の名前を忘れて……………』

尚吾さんの言葉が私の恐怖を押しとめる枷になっていたのかもしれない。

私の唇は小刻みに震える。

「俺は 誰だ？」

尚吾さんは再び強く目を瞑り、そして再び目を開ける

「しよ……………ご……………ちゃん？」

私は怖かった。

数分前まで落ち着いて話していた人が今、明らかに侵蝕されている。

尚吾さんの目から滴るのは

絶望の

赤い

涙であつた。

拾ノ月； 家族

「あんだ！ 俺の

顔は

どう な っ て いる？」

「……ああ……ああ」

声が出ない。目の前で怒っている事を理解するには暫くの時間が掛かりそうであった。しかし、自分の状態を理解できず、半ば錯乱状態の尚吾は朱里に考える時間を与えてくれない。

「俺 は 誰 ？」

顔が わか

らない。

熱い 暑い 厚い

顔があ あついいいい！？」

尚吾は顔を掻き塗り爪が顔の皮膚に喰い込む。

「しよ、尚吾さん！ 止めて下さい！」

「ああああ！？ 離せ！ 痛い 熱い

俺は誰だ！？ オマエは

ダレダ！？」

「尚吾……さん」

唇が震える。

尚吾の目はもう、焦点が合っていない。それどころか人間の目をしているかどうかも怪しかった。

顔は爪により傷つけられた数本の血の線が通り、全体の顔は判断できない。

「アツ

イ

ダレダ

オマエは オレは

ダレダアアア!?」

これが、『月の満ち欠け』

これが、『赤い月』

私の身体は『逃げる』と命令してくる。しかし、身体は動かない。腰が抜けたのではない。

尚吾からあふれ出る負の力に足が根を張ったように動かないのだ。

「ニゲ      口」

「えっ?」

「ニゲロ、      出口は

このさきだ。

ハシレ

ニゲろ!」

「尚吾さん!      まだ意識が      」

「      ウガアアアア      」

尚吾さんの必死の声は私の耳に届く。

しかし、私が尚吾さんに近づこうとした瞬間。一瞬光が戻っていた様に見えた目は再び光の灯火が消され、狂気の咆哮が私の鼓膜を揺さぶる。

「  
朱里がなにを言ったのかはわからない、尚吾の咆哮によってその言葉は遮られ彼の耳にも、行った本人にも聞こえてはいなかったであろう。」

だが、確実にそして。朱里は出口に向かって走り出した。

「これは？ どう言う………ことだ？」

俺は言葉を失っていた。

俺は確かに鼓膜を破るような咆哮を聞きつけ、ここに走ってきた。俺の考えが正しければそこには朱里がいて、あの2つの死体を作り出した犯人もいると思っていた。

だが、現実が違う。

オレの目の前にいたのは1人の男性であった。

死体ではない。息はある。

だが、顔が真っ赤に染まり表情は何えない。俺が何故、その男性が生きているとわかったかと言うと、それは荒い息を抑える肩が揺れていた事と、僅かに動いている指の動きと言うことだった。

男性は俺に気付いている様子はあったが、襲う様子も無ければ近づく様子も無い。ただ、自分の荒い息を宥める事だけに集中していた。

「生き残りか？」

男性は途切れ途切れの言葉を喋りながら俺に質問をしてくる。

「ああ、倉嶋優一だ。あんたは？」

「……くらしま？　そうか　あんた

が　『優一』くんか……」

明らかに俺のことを知っているように話すその男に俺は疑問を持ち、そして1つの推測を立てる。

「あんた……まさか、『尚吾』さんか？」

電話越しに聞いた朱里と共に行動しているはずの男の名前をその血まみれの男に俺は恐る恐る聞いてみる。

手にはじつとりと脂汗が滲み、その男性を見る俺の目が、暗闇に包まれる通路の先へと視線が移る。

「そう　だ。　あの女性は　このさきに行　った

走　れば　すぐ　お　いつける」

「……………」

「どう　した？」

俺は少し悩んだが、ポケットに忍ばせていた歪んだ指輪を血まみれ男性に差し出す。男はその指輪を見ると血でふさがれた目を見開き動きが鈍い腕で指輪を握ろうとする。

「それを

「どこで?」

割とはつきりとした口調で男性は俺から指輪を受け取る。

「この地下通路に降りて来た時に見つけたものだ。壁には大量の血が飛散していて、この指輪も血がふき取られていたみたいだ」

「ほ

か には?」

「……………地下通路を通っている時に横穴を見つけた。そこには血溜まりに浮かぶ女性と男の子の遺体があった、……………その女性の遺体にはこの指輪と同じ物をはめていた」

「……………そう

か……………」

男性は壁にもたれ掛かっていた身体を起こし、俺に話しかけていたが俺の答えを聞くとその勢いも失せ、ぐったりとうな垂れる。

「……………うっ! ゴハアアッ」

「っ!?!?」

耳を塞ぎたくなるような音と共に男性は盛大に吐血した。

その吐き出した血は地面に飛散し、その飛散した血は優一の靴にも飛び散る。

「だ、大丈夫」

「行け!」

「えっ?」

「俺が自我を保っている時間はもう長くはない。赤い月の事は全ての女性に教えておいた。さっさと行ってくれ、ケジメは自分でつける」

吐血した事で一時的にはっきりと意識を取り戻したのか？ 男性は今まで以上にはっきりと俺にそう行ってくる。

「『赤い月』？ 『ケジメ』？ 何の事だかさっぱり」

「良いから行けっ！ 死ぬぞ」

「っ！？ ……わかった。朱里をここまで連れて来てくれて……」

…ありがとう」

男にもう余力がないことを悟った俺はひと言、心からその男性に礼を言っ走り出す。

よくは見えなかったが、その時の男性の顔は笑っていたような気がした。



「『ありがとう』か……どれ くらい だろうか  
人に礼 を言わ れたのは……」

俺は懐にしまい込んでいた小さなナイフを取り出す。

「朱里さんか……… 幸せにな、逃げ切るんだぞ」

俺は『優一君』から受け取った指輪を見つめ、目から涙を零した。

「まだ、血以外 も流れるんだな……  
ゴメンな、痛かっただろう。」

今、行くから ま た3 人で

暮ら そう  
瞳、尚慈………」

俺は目を瞑り、尖ったナイフで

自分の心臓を

貫いた……

拾巻ノ月； 最愛

「ハア……ハア……」

私は走り続けた。

後ろを振り向かずには私はただ、全力で視界の悪い暗闇を走り続けた。

しっかりと握りしめた手の平にはじつとりと汗をかき、その感覚が気持ち悪い。

尚吾さんは言っていた。あの症状は『伝染病』だって……

だから尚吾さんも発症したし、あの誰も居ない町では無言の惨劇が起きたのだ。

じゃあ

「ぎゃっ!?!」

闇雲に走っていた私は地下通路の僅かな窪みに足を取られ、短い悲鳴と共に前のめりに転ぶ。

じゃあ………私はどうなの？

「っ……」

どうやら手の平を擦り剥いた様だ。見なくてもその独特の痛みと熱がこもっている所からそれがわかる。

ポケットから絆創膏と取り出そうと私は、とり合えず立ち上がり、ポケットの中を探る。

と、私は額に汗をびっしょりかいている事に気付く。

今まで夢中になって暗闇を走っていた為に額まで汗で濡れていたなんて思っていなかった。私は汚れるのも厭わず服の袖で乱暴に顔に付いた汗の玉を拭く。

「っ!？」

私は不意に眩暈を感じてしゃがみ込んでしまう。

ただ、いろいろとあった為精神的に疲れているのだらうと自分にいい聞かせるのだが、そうではない。

立てないのだ……

しゃがんでいたはずの私は立つどころか腰が抜けてその場に尻餅を付くような形で座り込んでしまう。足は笑っており、まるで自分の物ではない様だった。

ポタッ

不意に静寂とした地下通路に何か落ちる音が私の耳に微かに届く。

遠くない。近い？

そう遠くない場所で聞こえた音。私は辺りを見回すがその正体を掴む事が出来ない。

不意に、自分の顔にまた汗が垂れている事に気付く。  
無意識の内に袖でふき取り、その袖に無意識で目をやる。

「っ！？」

近い……すぐそこ

「う……そ……だ」

暫しの停止の後、私はやっと声を絞り出した。  
袖には確かに……真っ赤な血が擦れた後が残っていた。

毛穴が全て開く感覚に囚われ、汗がブワツと全身から出始める。  
自分の頭の中で何とかこの事を整頓しようとする無理に話をつなげようとする。

しかし、思いつかない。

転んだ時、私は前のめりに転んだが、それは顔を打たないように無意識にしたことで、だからこそ手の平を擦り剥いているのだ。

じゃあ、この血は？

震える手で私は恐る恐る鼻の下を擦る。

……手には真っ赤な鮮血が擦れている。

私は一度も鼻を打った覚えはない。

私？

「私……だれ  
だっけ？」

「っ！？」

自分で言っている事に恐怖を覚える。

名前、名前名前！

私は自分の名前を必死に頭の中で思い出そうとする。しかし、出てこない。

「何で？ ……助けてよ ……嫌だよ

優一 君 助け

てよ」

私は自分の名前がわからなくなっていた。それは発症を示しており、居るはずのない『彼』に助けを求めながら、ゆっくりとうな垂れながら、ゆっくりと目を……………閉じた。

「ハア…………ハア…………」

俺は足元を懐中電灯で照らしながら走り続けた。

あの男性が言っていた『赤い月』『ケジメ』。いろいろわからな  
いことも多かったが今は朱里がこの先に居るといふ事実だけで、十  
分であった。俺は足を急がせ飛ぶ様に走る。

「  
れ」

「っ!？」

不意に誰かの声が耳に入る。

俺は走るのを辞め、額に溜まった汗を袖で乱暴に拭う。

懐中電灯で照らし、その先を見据える。と、そこには確かに朱里  
がいた。

「朱里！」

見間違える事はない。朱里は体育座りをして顔を膝に埋めていたが、その様子を見ればそれが誰かは俺には簡単にはわかった。

俺は朱里に駆け寄る。しかし、朱里は顔を上げようとはしない。

何故？ 声が届いていない？ いや、そんな事はない。これだけ静かな通路なのだ。声が聞こえないはずがない。無視しているのか？

いや、違う。

俺は考えを振り切りとにかく朱里の傍に駆け寄る。

「朱里、どうしたんだ？」

俺は彼女の肩に手を置き、俯いている顔を覗き込んだ。

「ダメ」

「えっ？」

「ミナイデ……」

明らかにおかしい声で朱里は俺を拒絶する。肩に置いた手を体で揺すって落とし、より一層顔を埋めて首を振る。

「どうしたんだ！ 朱里。顔を見し」

「ミナイデ！」

朱里が俺の頬に平手を加える。

「朱里　っ！？ その顔……」

「ミナイデ………ミナイデ」

気づいた時には既に遅かった。



朱里の顔は血でいっぱいだった。もう、昔の朱里の顔を確認することはできない。

目から、鼻から、耳から……血は顔中を侵蝕し俺の時間は一瞬止まる。

「タスケ テよ。 優一君。 私を 助けて よお」

これが、あの男性が言っていた『赤い月』。

俺は悟った。これがあの異様な街の元凶なんだと。

「朱里……落ち着いて、必ず助ける。だから、今までの事を全て、俺に話せ」

俺はゆっくり朱里を抱き寄せる。

久しぶりに逢ったような愛しい気持ちに俺はなる。目の前にいる抱きしめている彼女はどれだけ外見が変わってもそれは最愛の人なのだ。俺は彼女に悟られないように涙を流した……………

拾貳ノ月； 例外

俺は朱里からいろいろと重要なことを聞いた。

赤い月のこと、それが伝染病だと言うこと、来る途中で出会った尚吾と言う男性が助けてくれたと言うこと。

だが、いくつかわからないことがある。

「その尚吾さんは伝染病の進行順が明らかにおかしい。」

それは、今までの話が本当だったら明らかに矛盾している点がある。尚吾さんはほぼ同時に鼻血を出し、自分の名前を忘れた。

その事を考えると、昔とは違う感染の仕方。つまり『例外』が出てきたわけだ。

それが吉と出るか？ 凶と出るかは分からない。しかし、その事を追求するしか、今、朱里を救う方法は俺は思いつかなかった。

そして、他にも『例外』が起こったのだ。今、現在。朱里の血は止まっているのだ。

とめどなく流れていたはずの血は止まり、朱里自身も随分と落ちて着いていた。俺が会った尚吾さん赤い月を発症していた。そして、俺が彼と話している時、彼の顔からは血が止まることはなかった。

「自分の名前と歳、あと、俺の名前を言えるか？」

「倉嶋朱里。21歳、あなたは優一君です」

「よし。大丈夫だな」

俺はこうして10分毎に朱里にこの質問をしている。今の様子だと急に病気が進行することは考えられないし、何より今は朱里に俺

の存在を確認させ、安心させるといふ理由もあった。

「朱里、この病気の特徴は忘れていくと言うことだ。それは何故かはわからない。だが、何故最終的に親しい人の名前が最後まで頭の中に残っているかわかるか？」

「……………その親しい人が最終的な人間の心の支えになっているから？」

「そうだ、人の最終的な支えになれるのは自分じゃない。他人だ。いいか？ 良く聞け、俺はお前を助きたい。お前は俺の名前、俺と過ごした日々を大事に覚えている。もし、お前が名前を忘れていたりしたら、俺が……………俺が何度でも呼びかけてやる」

「優一君……………」

「行こう。外へ……………」

俺と、朱里はゆっくりと歩き出した。俺は繋いだ手をぎゅっと握りしめ、誓った。

もう、離さない……………絶対に……………

「自分の名前と歳、あと、俺の名前を言えるか？」

「倉嶋朱里。21歳、あなたは優一君です」

「よし、大丈夫だな」

あれから数十分。朱里に大きな変化は見られない。時折血が垂れることもあるが、それもごく少量で拭き取れば気にならない程度であった。

「っ！？」

「っと、大丈夫か」

急に朱里が俺の方によるめく、たぶん貧血であろう。あれだけ血を流してはそれは当然の症状だし、仕方ないことだ。

しかし、いつ先ほどみたいに血を流すかわからない。病院で献血を受けるか、それとも何か食べさせないと不安をぬぐい去ることはできない。

「……朱里。少しの間、目を閉じてろ」

「へ？ う、うん」

朱里は俺の真意をわかってはいない様だが今それを話す気は俺にもない。俺が朱里に目を閉じさせた訳は目の前に見える影が俺の目に映ったからである。別に嫌な感じはしない。いや、それ以前にどこかで見たような……

『あなたの 最愛の 人は 誰？』

「っ！？」

俺は言葉には出さなかったが驚き僅かに後ずさりする。声は聞こ

えなかった……はずだ。

距離的には10mほど離れている影は俺から見て、僅かに口元が動いたとしか感じなかった。しかし、俺の頭の中にはその影が言ったはずの言葉が届いていた。

影はクスリと笑うと薄暗い地下通路を走っていく。

「っ!?!? 待て!」

「きゃっ!?!」

俺は瞬間的に朱里を抱上げ、その影を追う。朱里も俺の首にしがみ付いていたお陰で走りやすかったが、影はどんどん俺から離れていく。

影はどう見ても子供ぐらいの大きさしかない。俺もいくら朱里を抱上げているとは言え、それぐらいでは子供に負けるぐらい足が遅くなる事はない。

『あな たの 最愛の人 誰?』

「っ!?!? またか……!」

声はしない。

脳にそのまま言葉をぶち込まれているようであった。

気分が悪い。俺は影を追いかけてながら次第に眉間に皺が寄るのがわかった。

「俺の最愛の人は、朱里だ!」

「ゆ、優一君!?!? 急に如何したの?」

いまいちこの状況について来れない朱里はただ、誰もいない地下通路に向かって俺が叫んでいるとしか思えないらしい。

確かにそれはただの変な人だ。しかし、俺は今、それどころでは

なかった。影はどんどん離れていく、それは俺をあざ笑うかの様に走っていき、俺もその影に必死に喰らい付きながら、追いかける。

『自分の命 最愛の人の命  
選ぶ なら どっち?』

「俺は、自分の命を投げ出しても朱里を助ける!」  
俺は本能的にその影にそう答える。  
間髪いれずに答えたので影も一瞬動きが鈍る。

「あと少し!」

俺は地面を蹴って、その影に急接近する。

『!?!?』

「捕まえた!」

俺はその影を捕まえた つもりだった。

「えっ?」

しかし、影はすぐになくなる。そして辺りを見ると、そこは既に地下通路を抜けて山の中に出ていた。

「どつ言つ事だ?」

俺は乱れる息を整えながらとり合えず、朱里を地面に下ろす。

影はもうない。それどころか、地下通路の出口がどれだけ探しても見つからないのだ。

俺たちは確かに薄暗い地下通路を走ってきた。そして、今はその地下通路を抜けてどこかの山中にいるのだ。

それなら出口は何処に行った？ 全て幻だったのか？ いや、違う。俺の服には朱里を介抱した時に付いた血の後がしっかりと残っている。『赤い月』は幻じゃない。

「優一君？ 如何したの。難しい顔してるよ？」

「……ん？ ああ、悪い。それじゃあ、少し急ごうか」

時間はわからないが、木々の間から見える空は既に暗くなっていた。麓の方に明かりが見えるのでそちらの方に行けばいいと思うが、どうしても地下通路の出口の事が気になって仕方が無い。

……だが、そんな事を考えている暇も無いのも事実だ。今は朱里を休ませる事が肝心だ。

俺は、朱里から聞いていた、小屋を探す………が、そんな物は見当たらない。

少し見通しの良い所に出て辺りを見回すが、小屋らしき物はない。

「優一君。私は大丈夫だから、山を下りよう。今日は月が　　っ！  
？」

「如何した？ 朱里」

一瞬朱里の顔が強張ったのに気付いた俺は朱里の見ていた方へ目を向ける。

朱里が空を見上げるその方角には……

「なんだよ？　これは……………」

目の前には満月が大きく現れていた。山の中腹辺りだから、俺たちが住んでいる場所より、月が大きく見えることはまだ納得できる。しかし、問題はそこではない。

「赤い月…………？」

その大きな月は

真っ赤に燃えていた……



拾参ノ月； 矛盾

「どうということだ？」

俺は空に浮かぶ大きな赤い月を見据え、呆然としていた。

確かに月が赤くなるという現象はある。

例えば空気中に山火事や噴火などでちりが舞い、月の光が拡散され赤い光だけが人間の目に映ると言うことがある。

だが、辺りには何かが焼けたような臭いもしなければここ最近山火事や噴火の情報を耳にした事は無かった。そしてなによりも重要なのはそれが『今』起きて居ると言う事だ。

別名、赤い月と呼ばれる病気に発症した朱里を連れて外に出たら、外は大地を照らす赤い月が昇っていたなんてタイミングが良すぎる。

「朱里、大丈夫か!？」

俺は不安に駆られ、朱里に駆け寄る。朱里は空の赤い月を呆然と見つめている。

目の焦点は定まっておらず、俺の不安は増徴する。

「朱里！」

俺が大声を出すと朱里はゆっくりとこちらを向いた。目は確かにこっちを向いている。俺はとり合えず安心して立ち止まる。

『アナタ ダ レ?』

「なっ!？」

突然、カタコトで喋りだした朱里、心臓の高鳴りを押さえる為、手を膝に付き一瞬目を放した際に朱里の目は再び焦点を失っていた。

「俺だ! 優一だ、思い出せ! 朱里!」

俺は力いっぱい朱里を抱きしめ、耳元で朱里の名前を呼ぶ。

「ちくん?」

「っ!？」

俺は朱里の声が聞こえたと思っ少し力を抜く。

「痛いよ、優一君。如何したの? 急に抱きかかえて走り出したり、抱きしめたり……そりゃ、好きで居てくれるのは嬉しいけど、少し恥ずかしいよぉ……………」

「朱里、なんとも無いのか? 俺の名前がわかるか?」

「もちろんだよ。私は朱里で、あなたは優一君。私の夫だよ」

俺は安堵し朱里を抱きしめていた腕の力を緩め開放する。

「ふう、苦しかった」

「朱里、大丈夫なのか?」

俺は朱里の身体をペタペタと触って確認するが特に以上はない。焦点も定まっているし、充血はしているが、目や耳からの出血も無い。

「大丈夫だよ? どうしたの、そんなに慌てて、やっと外に出れて今から下りようって優一君が」

「? 待て、朱里」

「えっ?」

「今なんて言った?」

「『優一君が今から下りよう』?」

おかしい。

もちろん笑い事ではない。俺は外に出てから異変を感じ朱里から知らされていた小屋を探していた。

決して山を下りようなど入っては居ない。言ったのは朱里だ。

しかし、その朱里本人は俺が言ったと勘違いをしている。二度聞きなおして同じ答えが帰ってきた時点で朱里に間違いはない。

正確には自分の言っている事が矛盾している事に気が付いていないのだ。

こんな症状は朱里には聞いておらず、俺は焦る。

「どうしたの? 優一君。怖い顔して?」

朱里が俺の顔を心配そうに覗いてくる。別に変わった様子はない。

「いや、別に大したことじゃない。それじゃあ行くところか」

俺は朱里をひよいと抱きかかえ、そのまま山を下る。

「えっ? 優一君、恥ずかしいよ!」

それは所謂お姫様抱っこでさきほどのいきなりやられた時とは違う羞恥心が朱里の頬を染める。

「ああ、悪かったな。ついな」

俺は一度朱里を下ろし、再度。今度は朱里をおぶって山を下る。

朱里は一瞬渋ったが、血の流しすぎで貧血気味なのは自分が一番良くわかっていたらしい。そのまま、渋々俺の首に掴まり、おぶられる。

「じゃあ、下りるけど。絶対上を見るな」

「……どうして？」

俺が念を押して言ったため朱里は少々不思議そうな顔で後ろから俺の横顔を見つめる。

「つ、月が出てるとは言え山中は暗いからな。俺が見落とした物をお前が見つけてくれるかもしれないだろ？」

「でも、懐中電灯があるし……」

「そ、それは……その……ほら、俺はお前を背負っているから懐中電灯を持ってないし、お前は俺が背負ってるから頭1つ分俺より高いだろ？」

「なるほど、わかったよ」

朱里は苦し紛れの俺の言葉で理解したのか、懐中電灯を構え、山中の暗闇を照らし始めた。

「ありがとう、じゃあ行くぞ」

「さっし」

俺と朱里はそのまま山中をゆっくりと歩いていった……

『夜に咲く、赤い月』 登場人物紹介（前書き）

今更ながら知らないかもしれませんが、とり合えずまとめてみました。

『夜に咲く、赤い月』 登場人物紹介

倉嶋 優一 くらしま ゆういち 22歳

『夜に咲く、赤い月』の主人公。  
物事を冷静に捉える頭脳やそれを可能にする体力を持つ青年。  
某大手企業の出世頭でもあり、将来を有望視される若者。

倉嶋 朱里 くらしま あけり 21歳

『夜に咲く、赤い月』のもう1人の主人公。  
優一の妻でもあり、既に入籍済み。  
緊張すると途端に行動範囲が狭まる。  
一般的な臆病な性格だが根はしっかりとしている。

松田 尚吾 まつだ しょうご 26歳 死亡。

霧に包まれた不可解な街の住人。

元は建具屋を営んでおり周りでは結構な人気があったが、『赤い月』感染の為、自ら命を絶つ。

決断力、行動力共に高く。優一と似た感じの男性だった。

松田 瞳 尚慈 まつだ ひとみ しょうじ 24歳 4歳 両名死亡。

尚吾の妻と子供。地下通路で何者かに殺されてしまった。  
尚吾は逃げ切れて居なかったことを知っていたらしく、もしかしたら殺した犯人も気付いていたのかもしれない。

謎の青年      ?歳

「不可解な街で朱里が見た影。  
見間違いではなく本当に居たのだが、何者かはまだわかっていない。」

謎の少女      ?歳

優一の前に何度か現れた少女。  
理解不能な事を聞いてはくるも幻ではなく、答えると反応もあった。

赤い月

不可解な街で何百年に一度起こる伝染病。治療の仕方はわかっておらず顔全体から血を流し、自分の名前や歳などを忘れ、最終的には自我を失い人を襲い始める。  
発症時には激しい痛みが伴い。その時点で死んでしまう感染者も



居る。

拾伍ノ月； 可視・不可視

「 、居るか？ 」

革のソファ―に座って青年が誰かを呼ぶ。

「 ーじ。 居る。 」

出てきたのは小柄な少女。言葉遣いがカタコトなところを見ると  
どうしても体躯以上に幼く感じてしまう。

「 今あの人たちが山中を下りてる所だから、招待してきてくれない  
？ 」

青年は傍らに置いてあったジュースを口にしながらニヤリと笑う

「 わかった。こゝ、に 連れて来る 」

少女は詳しい事は何も聞かない。

ただ、青年が言った事に答えているだけ。まるで操り人形のように

……

少女の影が消えるのを気配で確認した青年は笑みを一層深め

「頼むね〜……お人形さん

」

少女に向けられた言葉は少女の耳には届かず、暗い部屋の闇に静かに吸い込まれていった。

「ふう……ふう………」

暫く歩いていると優一君の足は少し震えだした。

息も切れ始め、私に悟られまいと抑えてはいるが口からは息切れした吐息が零れる。

無理も無いと言われればそれまでだ。確かに、あの不可解な街で私が最初に目を覚ました時はまだ空は明るかったのだ。それから優一君は旅館を歩き回り地下に潜り。今、私を背負っては急な山道を下っているのだ。

人の手がまるで加えられていない山道はコンクリートの補整された道など無く、それどころか人の手によって作られた看板すらない。頼りは、時々見える麓の明かりだけでそれ以外はまだ何も手がかりが無いのが現状であった。

「優一君、大丈夫？」

「大丈夫だ。それより今は早く麓に下りる事が先決だ」

何でそんなに急いでいるかは私にはわからなかった。

今直ぐにでも優一君の背中から離れて自分の足でこの山を下りたい気持ちはあるのだがだからと言って足元が覚束無い状態でこの急な山道を歩けば間違いなく転倒してしまう。それは優一君を心配させることにも繋がるし何より地下通路での血の記憶が鮮明に私の脳裏に映る。

今度転んで出血してもし止まらなくなってしまうたら……そう思うと私の腕は優一君の肩の腕で小刻みに震えていた。

「？」

ふと、優一君が歩いていない事に私は気付く。

別に懐中電灯を照らしている位置がずれているわけでもない。だが、優一君は懐中電灯の光が届いていない更に奥の方を凝視して動かなかった。

もちろん私にはそこに何があるのかはわからない。特別目の良い訳でもない私だが、悪くも無い。それは優一君も同じでこの距離で優一君が見えているものを私が見落とすはずが無かった。

「……お前は誰だ？」

「えっ？ 倉嶋あけ」

「さつきも会ったな？ お前は何故俺の前に現れる？」

私に向けられた言葉だと思っていたがどうやら違うようだった。

優一君は暗闇から目を逸らさない。

ただ一点だけを見つめ、喋っている。

「優一君、誰と喋ってるの？」

「誰って……目の前にいるだろう？」

優一君は緊張した口調のまま、視線を外さず私の質問に簡潔に答

える。だが、私には何も見えない。

「見えない……けど？」

「見えないって、ちよっと下りてくれるか？」

「えっ？ うん」

私の答えに疑問を持ったらしく私を背中から下ろして今いた位置から数歩下がって私の顔を覗く。

「充血はしているけど、特に出血はしてないよな？」

「うん、名前もわかるよ」

「じゃあ何でアイツが『見えない』？」

不思議だった。

この状態で嘘をつくとは思えない。ただ優一君の不思議そうな顔は私から離れると再び暗闇の方へ目をやる。

「一緒に行くつもりはないな」

優一君は誰かと喋っている。私にはその『相手』が誰かはわからないが確かに誰かが喋ったような『感じ』がした。

「っ！？」

いきなり動揺した様子を見せる優一君。何を話しているかはもちろん知る事は出来ない。

「くそっ！ わかった」

「えっ？ 優一君！？」

優一君は再度私を抱上げると明かりもつけずに暗闇の中を走って  
いく。

その顔は真剣そのもので冗談でやっているとは思えない。

「ゆ、優一君待って！」

しかし、優一君は私の言葉が耳に入っていないかのようにそのまま走り続ける。

私と優一君はそのまま暗闇の中を走っていった……

拾陸ノ月； 『ニセモノ』

「お前は何故俺の前に現れる？」

「優一君、誰と喋ってるの？」

ふと、俺のが背負っている朱里が不思議そうに俺の顔を覗きながらそういつてくる。俺たちの目の前に居るあの少女に朱里飲めは向いていない。

見えていないのか？

「誰って……目の前にいるだろう？」

しかし、朱里は難しい顔をしてあの少女がいる方を凝視するが一向にその難しい顔を緩める様子はない。

「見えない……けど？」

「見えないって、ちよつと下りてくれるか？」

「えっ？ うん」

俺は赤い月が再発しはじめたのかと焦る俺の心を押さえ、冷静を保ちながら朱里を背中から下ろす。

「充血はしているけど、特に出血はしてないよな？」

「うん、名前もわかるよ」

「じゃあ何でアイツが見えない？」

先ほどから歯車がどこかかみ合っていないことは理解していた。ただ、ここまでそれが続くと『不可解』が段々『不安』へと変わっていく。

俺は先ほどから一步も動かない少女に目を向け、一步軽く下がる。

『 私と一緒に 来て。 ほしい』

途切れ途切れの言葉であったが、俺は少女が言う事を理解してそして断る。

「一緒に行くつもりはないな」

『彼女。 感染してる。 このままだと死。 ぬよ?』

「っ!?!」

一瞬にして赤い月に感染した尚吾の顔が脳裏にフラッシュシユバックする。

判別がつかなくなった顔。

途切れ途切れになった言葉。

血の涙を流す、身体と心……………

冷静を保っていたはずの俺は死と言う言葉を聞いた瞬間。 誰にでもわかるような同様をみしてしまう。

『彼女。 生かしたいなら。 ついてくる。 こないなら

彼女。 死。 ぬ』

「くそっ! わかった」

「えっ? 優一君!?!」

彼女は俺が折れたのを確認すると薄く笑い暗闇に走り出す。

選ぶ道は最初から1つしかなかったらしい。俺はせめてもの抵抗で悪態をつきながら再度朱里を抱上げ彼女の後を追う。

「ゆ、優一君待って!」

朱里がなにか言っているが、今はそれどころではない。

俺は見失わない様に、そして朱里を生かすために謎の少女の後を見通しの悪い山道を越えて懸命に追っていた……………

「ハアハア……………」

少女を追って山道を走っていた俺は流石に息を切らしていた。俺は朱里を一度下ろし膝に手を置きながら短く息を吐く。

『此処』



顔を上げるとそこには少女とそして……………

大きな洋館が聳え立っていた。

「何だ？ 此処は」

明らかに異彩。

それが第一印象であった。こんな山の中腹に洋館があること事態異彩であるが何よりこの洋館にはあの旅館と同じような負のオーラが出ていた。

「優一君……此処って」

どうやら朱里にもこの洋館は見えているらしい。俺は少女が入っていたドアに目をやると、ドアは小さく開いており奥からは少女の小さな手が俺を誘っていた。

「朱里。あのドアの先の少女。見えるか？」

「しょう……じよ？」

朱里は不思議そうな顔をする。別に朱里の位置からでも小さく開いたドアの奥も見えている。それなのに何も反応を示さないと言う事は朱里には見えていないのである。

「私 見え ない？」

「ああ、少なくとも朱里には見えていない」

少女は不思議そうに小首を傾げて、そして、俺たちに近づく。思わず、一步。後ずさりをしてしまうが、少女に悪意を感じられないとわかると、そのまま立ち止まる。

ペチッ

軽い音と共に、朱里の頬が、少女によって叩かれる。

いや、叩くと言うより、触るに近いものである。

「あ れっ？ 女の子？」

朱里は先ほどまで、その存在を感じる事が出来なかった少女に目

を向け、驚いた顔で頬を押さえながら少女の顔を見る。

『これで良い。つい てきて』

少女は、それだけ言つと、そのまま振り向かず洋館へと入つていく。

「とにかく、入るぞ」

「うん、わかつたよ」

俺は朱里の手を引いてドアの中に入る。

中は大きな通路が続いており少女しかいない。少女は相変わらず俺たちの方を見ながら奥の部屋に先導する。

俺たちは奥に進むにつれ強くなっていく違和感と共に奥の部屋へと続くドアに手を掛ける。

ギィィつと現代には聞かないような古めかしい音と共にゆっくりとドアが開き、無駄に広い奥の部屋に入っていく。

「いらつしゃい」

「っ」

明らかに場に不似合いなテンションの音が吹き抜けになっている部屋に響く。声は奥においてあるソファアから聞こえ、俺たちに背を向ける形でソファアの上に誰か座っていた。

「誰だ？」

静かに言つたはずの声もドンドン声が拡張し、響き、薄れていく。

「初めまして、倉嶋優一さんに、朱里さん？」

ソファアから立ち上がってこちらに向かつてくるのはブカブカの燕尾服を着た少年。

まだ、どう見たって十代半ばである。しかし、何で俺はこんな少年に恐怖にも似た違和感を感じるのだろうか。そう、あの旅館に入る

時に感じたような、どうしようもないような恐怖。

俺たちが警戒心を強めているのに気付いたのか、少年は僅かに渋い顔を見ると、直ぐに笑みを浮べる。

「失礼。僕は……そうだな……カケルとでも呼んでよ」

「あなたは何で私たちのことを知っているの？」

「んん〜？ あっ！ ちょっと待って。そこそこ邪魔だよ」

少年は朱里に目を向けると同時にその視線の隅に入った。先ほどの少女に移る。

「……？」

「あー！ もうじれつたいなあっ！」

ガッ

燕尾服に合わせた靴が、しゃがんで少年を見上げていた少女の頬を蹴り上げる。

少年少女と言っても、体格差は歴然で少女は簡単に吹き飛ばされて部屋の壁にぶつかる。

「なにを」

「何をしてるの！」

俺が声を上げようとした時、横から朱里が凄い剣幕で壁際でぐったりとする少女に駆け寄る。

「何でそんなに怒ってるの朱里さん？」

「何ってこんな小さな子供に手を上げるなんて！」

「別に良いんだよ。だって『それ』は自我なんて持ってないただの失敗作なんだから、僕を楽しませるぐらいしか『使い道』無いんだもん」

「『それ』とか『使い道』とか、この子は物じゃー！」

「物だよ」

朱里の声を遮るようにさっきまで笑っていたはずの少年の顔と声が一瞬にして変貌する。

「『それ』は人に慣れなかつた出来損ない。人の形をしているけど、自分の意思を持たないで、ただ僕の命令を聞く機械人形なんだから、それより」

もはや、朱里と少女には興味が無いのか少年は俺の方へ向き直り笑顔を向ける。

「君は特別な存在なんだ。『咲触れ』の様子も無いし、僕とちゃんと向き合ってもらえるんだから」

咲触れとなれない言葉が少年の口から飛び出すが、今はそれは後回しだ。

「優一君。私はこの子を連れて外に出てるよ？」

違和感を朱里も感じていたのか額に汗を滲ませ、少女を抱え出口に向かう。

「さて、それじゃあ何から話そうか？」

俺が何かを質問するのを見越してか、それともただせっかちなだけか？ 少年は燕尾服を調えつつ、俺の言葉に耳を傾けようとす。

「数百年に一度の伝染病赤い月とお前は深い関係があるだろう？」

「流石だねえ。例外に選ばれただけはあるよ」

「茶化すな」

俺が真面目な顔を見せると、僅かに口の端をつり上げる少年。

「お察しの通り、赤い月は僕が撒いた伝染病だよ」

俺はこの少年の態度が苛立たし思え、今にも飛び掛りそうな自分の身体を必死に押さえつけながら表情は冷静さを保っている。

俺はあの町で惨劇を目にしてきた。それを引き起こした張本人が目の前にいて、そしてこの事態を楽しみのうのと生きている事が俺にはどうしても許せなかった。

知らず知らずのうちに噛んでいた唇から一筋の血が流れる。

「あれれっ？ どうしたの優一くん？ 口から血が出るよ？」  
「朱里を治す薬をよこせ。そして、病原菌を振り撒くの辞めろっ！」  
部屋の中に俺の声が響く。

「無理だよ。薬はないし、病原菌は止まらない」  
少年はにこやかにそう言う。と先ほど座っていたソファの方へ駆け寄り、ソファの陰から1つの鉢を持ってくる。

「これが、赤い月の正体だよ、優一くん？」  
それは真つ赤に咲く、赤い花。  
いや、真つ赤と呼べる物ではない。これは真紅。純粹に赤い色しか混じっていない。花どころか茎も葉も赤一色で統一されていた。  
少年は驚く俺の姿を見つめ、クスクスと含み笑いをする。

「これが、 が作り上げた赤い花さ。これが振り撒く花粉は赤い月を発症させる効果があるって訳」

少年が言う『 が作り上げた』と言う部分が良く聞き取れなかったがとにかく俺はその花に魅入られたのか、呆然として足が動かなかった。

「ただ、一つ。不自然なんだよねえ……」  
少年が含み笑いをしたまま、そう言う。

「僕はともかく、何で君が赤い月に発症しないかなんだよねえ、僕とは違って君はモルモットだったはずなのに狂う事も無くこうして平常心を保って僕の前立っている。それは朱里さんにだって言えることだし、もう十分自我を失っていてもおかしくない時間帯のはずなのに、発症はしてるもの……進行が今までに比べて明らかに遅い」

「……………」  
俺は口を開かない。少年の言いたい事はわかっていたし、少年は

聞いて欲しそうだったが態々聞く義理もなかった。

俺が再度警戒を強めていると、少年の笑みが一生深くなる。

「つまり、君が発症を何らかの力で抑圧してるって事」

少年は楽しそうに言う。ただ、楽しそうに……

「……………お前、何でこんな事をしてる？」

「えっ？」

予想していなかった質問に少年の笑みが消える。

「何でこんな事をしている？」

「何でって……………決まってんじゃない！ データだよ！ 君たちを使って赤い月のデータをとってるんだよ！」

少年は慌てる。まるで、本能的に何かを隠すように

「何でそんな事を始めた？ 誰がお前に病原菌の事を教えた？」

「だ、誰って！？ そりゃ……………そりゃ……………」

少年の言葉が切れる。振り上げて叫んでいた拳を下げて、顔を俯ける。

「お前……………」

俺の仮説が残酷なまでに、少年の心を貫く…………

「お前……………『ニセモノ』だろ？」

少年は何も言わない。

ただ、呆然と立っている。

そう、

まるで、

人形の様に………

拾漆ノ月； 火の瞳（前書き）

始めの、残酷的描写がくくを消して見た。

当初考えていたより、あんまり怖くなかったのがその理由。

まあ、大丈夫ですよね？



## 拾漆ノ月； 火の瞳

「ハハツ！ ……なんだよ、ニセモノって……僕はちゃんとした人間で、その……えと………これは 僕の 意 思で」

少年の言葉がたどたどしくなっていくのを俺は聞き逃さなかった。気付いた時には少年の歯車は狂っていた。少年はただ、俯いたまま笑う。

ただ、その笑みに先ほどの余裕はない。それは、まさに破滅への笑みに、俺は感じた。

「なら、その花を作ったのは誰だ？」

俺は少年が持っている花へ指を指し、トドメと言わんばかりに最後の疑問を少年にぶつける。

これは非情なのかもしれないが、この惨劇を引き起こした相手に躊躇を考えるほど、俺の心にはもう余裕なんて残っていないかったのだ。

「花は ……？ あれっ？ 誰が？ ……？ 誰？」

少年が一度顔を上げ、答えようとするが、言葉が出ない。言葉の代わりに顔がどんどん青ざめる。

「誰？ だれ？ ダレ？ だ

れ？」

「お前も犠牲の一つだったんだよ！ お前がさつき足蹴にした少女は作り物なんかじゃない！ あの子はお前より『人間味』があった！」

「はっ？ 人間 味？」

「あの子はニセモノなんかじゃない！ ニセモノは………お前だ

っ！」

「僕がニセモノ？ アイツがホンモノで 僕がニセモノ！？」  
少年は錯乱する。

多分、もう前のような笑みを浮かべる事はないのであろう。

「ウソだ！ ボクはホンモノで アイツ  
が ニセモノ だ！」

ボクがホンモノで アイツがニセモノ……

ボクがニセモノで アイツがホンモノ

エツ？

ボク ニセ モ

ノ？ あああああああああああああああ

あああああつつつつっ！？」

それ以上は聞かなかった。聞く必要が無い。聞きたくない。

俺は壊れ行く少年から目を離して、ドアの向こうに居る朱里の元へと駆け寄った。

「朱里！ 大丈夫か？」

「優一君。私は大丈夫だよ」

朱里は少女に膝枕をしながら壁にもたれ掛かっていた。

少女は薄く笑みを浮かべ、安らかに眠っている。それは、少年の黒い笑みと違う。いや……少年もある意味では純粹だったのかもし

れない。

少女はまるで母親に抱きしめられているかのような安心感に浸った笑みをしていた。

「あの子は？」

朱里が俺にそう聞く。

もちろんあの少年のことをさしているのであろう。

カケルと名乗った少年。多分それも、あの少年を生み出した奴らが考えもなしに付けた名前なのであろう。

「あの子は」

「チガウツ！」

「!?!」

部屋中に響く声はドア越しでも俺たちの耳に届いていた。

俺は慌ててドアを開けると、そこにはさきほどまで頭を抑えて蹲っていたはずの少年がフラフラと立ち上がっていた。

「お前！」

「ボクはニセモノじゃない！ ボクを認めない奴なんて死ねばいいんだあ！」

狂った眼をした少年は不意にあの赤い花の鉢を床に叩き付けた。

「消える消える消える消えろっ！ ボクを認めない奴なんて死ねばいいんだ！」

鉢は床に当たった瞬間。砕け散った。そして、砕けた破片と共に目で視認できるほどの真っ赤な花粉が飛び散る。

「死ね死ね死ね死ね！」

何処からか持ってきた同じ鉢を少年は次々と床に落としていく。

その度に舞い上げられた赤い花粉が少年の周りに舞う。

「死んじゃえ！ しんじゃえ！ シンジャエ！ アハハハハツツ！」

最早、壊れた歯車は暴走を続けるだけしかなかったようだ。少年は壊れて、そして倒れ、赤い花粉の中で動かなくなった……

「うつ……あつ！？」

「つ！？ 朱里！」

俺は少年から視線を直ぐに朱里に移す。朱里は苦しそうに胸を押さえ額に汗を溜めている。

「朱里！ 大丈夫か！？ 朱里！」

俺は勢いよくドアを閉めて、朱里に近づく。

「ゆう い ち く ん

痛い

よお

朱里は胸を掴みながら駆け寄った俺にもたれ掛かってくる。

「朱里！ しつかりし」

「何でお前は痛くない？」

「えっ？」

驚いた。

驚きの余り固まる俺。

背筋の凍るような低い声。それは俺の声じゃない。なら、誰だ？

この少女？ いや、相変らず目を瞑り、起きる気配はない。じゃあ誰？

「何で痛くない！？」

「うつ！？」

急に首を絞められ俺は変な声をあげ、苦しむ。首を絞めたのは

「朱……里？」

「誰だ！？ 私は誰だ！ お前は誰だ！ 痛い痛い痛い痛い痛い  
っ！ 何でお前は痛くないっ！？ 私はこんなに痛いのに！」

朱里の小さな指が俺の首に埋まる。

意識が遠退きかける。脳に酸素がいかない。振りほどかなきゃ、  
振りほどけ、動け！

「うぐっ！？」

しかし、容赦ない攻撃に、俺は戸惑い、そしてその戸惑いが隙を  
作った。

腕に力が入らない。視界が歪む。

朱里……あけ……り……

「ダメッ！」

「ぐっ！？ ごはっ！？」

急に首を解放され、俺は冷たい空気を肺に大きく吸い込み、そし  
て咳き込む。

今、静止の言葉を掛けたのは紛れも無い朱里だった。だが、しか  
し、朱里の左手は、まだ俺の服を爪を立てて掴んでいる。

「朱里！」

「いやだ、辞めてよ！ 傷つけないのっ！ どんなに辛くても  
優一君を巻き込むのはやめて！」

自分の意思に反し動く左手を右手で必死に静止する朱里。

「ウツ……ゲホゲホッ！」

朱里は盛大に咳き込み、吐血する。

鮮血な血は、自分で受け止めようとした右手から零れ、飛び散り、  
床と俺の頬に朱里の血が付く。

「朱里！」

俺は、朱里を抱きしめる。

「何で、おまえばかり楽になれるっ！？」

また低い声が俺の耳に届く。

俺の背中に回っていた手に爪を立てられ、俺は苦痛で顔を歪める。  
「だめ！ 傷つけどく ない

のに……なんで………」

意識が混同している。これが赤い月の末期症状なのであろう。

己の欲求に答える自我と相手を思う自我。それが今、朱里の中で戦っているのだ。

「朱里……大丈夫。一人にはしない」

「優一君、ダメ。逃げて、私、優一君を殺しちゃうよお」

朱里の顔は抱きしめていて見えなかったが、多分泣いている。

俺の手に朱里の体温が伝わってくる。まだ……まだ！ 生きている。

「忘れたくないよ……優一君……忘れたく

ない」

「大丈夫、朱里の事は俺が覚えている。お前が忘れた時は、俺が思い出させてやる」

「ああああああっつつっ！？ 痛い

いたい

イ タ イッ！？」

朱里の爪が俺の背中に食い込む。

「大丈夫だ、朱里。」

「っ!?!?」

一瞬、低い声のままの朱里の動きが止まった。

抱きしめていた腕の力を弱めて、朱里の顔を見ると、血の涙を流すその目は赤く燃えていた。

「何度でも、俺はお前を読んでやる。何度でも、俺はお前のことを抱きしめてやる」

俺は朱里の脛の上に傷だらけになった手を軽く乗せる。

「だから」

「ゆうい

ち

くん?」

「ゆっくりと、おやすみ……………あけり」

俺はゆっくりと被せていた手を動かして、朱里の燃える瞳をゆっくりと閉じた……



拾捌ノ月； おはよう・おかえり（前書き）

展開が早すぎる気もしなくはない。

山を下りる件くたりを書いたほうがいいかもしれない。

だけど、自分の中じゃこんなラストが好きだった。

拾捌ノ月； おはよう・おかえり

真っ白な壁紙で統一された病室に温かい風が吹いてくる。

同じ色の真っ白なレースのカーテンが揺れ、ベッドの上で寝息を立てている朱里の長い髪も僅かに揺れる。

俺はあの洋館で朱里を眠らせた後、麓の町へと下り、無事に自分たちの住んでいた街へと帰ってきた。ただ、変わった事は朱里が目覚まसानかった事だ。

医者の見立てでは脳波は正常で体の外も内も悪いところは一つも無い。

目覚めないのが不思議なぐらいだと言っていた。

あの事件からそろそろ一ヶ月以上が経つのだろうか？ 秋が近づいてきた空は何処までも澄んでいた。

「……いつになったらママは起きるの？」

「ん〜それはね、優里ゆうりがいい子にしてたらすぐに起きるよ」

俺が、ベッドの横で丸椅子に座りながら本を読んでいると、真っ白なワンピースを着た小柄な少女が、優一の膝の上に登ってくる。

そう、この少女はあの少年……カケルと一緒に居た少女。

自我を持たないニセモノと呼ばれていた少女。しかし、少女は実際にこうして俺と会話をして、笑って、怒って、泣いて、とちゃんと人らしいことをしていた。

本当は最初この子も一緒に麓に下りた後、すぐに警察に行つて、この子の搜索願が出ていないか聞いたのだった。

しかし、予想は外れていた。搜索願どころか、身元も判断できる物すらもっていなかった少女は施設に連れて行くことになった。

そこで、俺はこの子を養子にすることにした。

短絡的過ぎるかもしれないが、それがこの子にとって一番いい気がしたし、この子を養子にするのは自分のためでもあった。

その時、既に予想していた朱里の謎の睡眠。その空っぽになった時間で、俺にとっては支えが必要だった。

そして、それがこの少女 優里だ。優一の『優』に朱里の『里』。これも、ありきたりすぎるが、それでも俺たちの気持ちが進められたその名前を持つ少女、優里は俺にとって、小さな……いや、大きな支えになっていた。

コンコン

小さなノック音と共に、医師が入ってくる。

「倉嶋さん。ちょっといいですか？」

「ええ、優里。ママの事、しっかり見てるんだぞ？」

「うん、わかったよ。パパ」

本をパタンと閉じて、優里の頭を撫でてやると、優里は花の様に笑い。立ち上がった俺の代わりに丸椅子に座って、小さな寝息を立てて眠る朱里をジーツと見つめていた。

「自宅療養ですか？」

「ええ、容態は安定していますし、毎日病院通いと言うのも大変でしょう。あの眠りの原因がわからない以上手の施しようがありませんから、一度今まで住んでいた環境に戻るというのもありかと思いまして……」

医師の言う事ももつともであった。

「わかりました。じゃあ、今から戻って退院の仕度をします」

「あつ！ いえ、別にすぐじゃなくても……」

「わかってますよ、だけど今したくすれば、夕方前には退院できま  
すよ」

「そうですか」

医師は苦笑いを浮かべながら、白衣の襟を直す。

別室で医師の話の話を聞いていた、俺は少しゆっくりめに廊下を歩き  
ながら、朱里のいる病室へと向かう。

「何か変化があったら、言って下さい」

「すみません、いろいろと」

医師とそんな話をしていると、俺の顔に一筋の風が通る。

前髪が僅かに揺れ、俺は一瞬立ち止まる。

「？　どうかしましたか？」

「えっ？　ああ、いえ、ただ……もう先生達のお世話になる事は少  
ないんじゃないかと思ってね」

「はあ？」

医師には優一の言っている言葉の意図が理解できないのか、小首  
を傾げながら一緒に歩く。

「理由をお教えしましょうか？」

「ああ、助かります」

医師は再び苦笑しながら優一の隣を歩く。

優一は笑みを浮かべながら、病室のドアを開ける。

ブワツと髪の毛全体を揺らす風が吹いてきて医師は思わず目を細

める。

「ふうつ、それにしても凄い風ですな。私もカルテが飛ばないように注意……しな ……………いと」

医師の言葉が止まる。

「そうですね、まあ、俺にとってはこの強風が幸せも持ってきてくれたんじゃないかと思えますよ。あれ？ ちょっとキザだったかな？」

「……………そんな事無いよ」

俺は病室に入って、はしゃぐ優里を膝の上に乗せながら丸椅子に座る。

いつも、横になって目を瞑っているはずの朱里はそこにはいない。

いるのは

「久しぶり……で良いのかな？」

「ああ、一ヶ月ぶりだ」

上半身を起こして、微笑む朱里が、いた。

「すみません。先生。もう一度検査をしてもらっていいですか？」

「えっ！？ ああ、はい」

医師も信じられないのか、素っ頓狂な声を上げて、頷き、人を呼

びに行く。

「ママ、おはよう」

「うん、おはよう。ゆーりちゃん」

朱里は微笑み、少女を抱っこして頬擦りをする。

「名前……」

「えっ？ ああ、優一君ならそう付けるかな？ って思って」

「何だ、寝てる間に聞かれてたかと思った」

「ううん、優一君が本当に待っていてくれるかどうか試す為に我慢してたんだよ？ 私」

悪戯な笑みを浮べる、朱里。

その言葉が本当か嘘かはわからないが、とり合えず俺は朱里を抱きしめた。

「きゃっ!?!」

朱里も急な事で戸惑う、優里も朱里の胸の辺りにしっかりと掴まり、離れるのを何とか防ぐ。

「大胆だね。優一君」

「そりゃー、一ヶ月を待ったんだからな、浮気しなかったのが奇跡だな」

意地悪な笑みを浮べる優一に朱里も再び微笑む。

「待ってっってくれたんだね」

「約束したしな」

「嬉しいよ。もし、優一君がいてくれなかったら、私ずっと眠っていたままだったと思う」

「そうか、ならもう程々にしないと」

力強く抱きしめた朱里の耳元で優一は呟く……

「おはよう、おかえり……あけり」

拾捌ノ月； おはよう・おかえり（後書き）

終わった！ 後悔はしていない！ 作者です。

思いつきと偶然で始まった『夜に咲く、赤い月』。途中で止めなくて良かったわ（笑）

まあ、後書きを今まで書かなかったせいかな、作品に魅力が無かったのかは知らないが、感想が一件もこなかったのが、ちょっとドキドキしてた。

まあ、他の作品を先に終わらせるつもりだったのにこっちが先に終わっちゃって、何だか自己嫌悪……

まあ、完結したからいつかなんて考えてたら来週テスト……

まあ、何とかなるしょ、それでは、ここまで読んで下さってくれてありがとうございます。

感想＆評価を書いてくれれば、私は泣きます（笑）

ありがとうございました。。。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7316g/>

---

夜に咲く、赤い月

2010年10月9日00時32分発行